

VI 保護者の状況

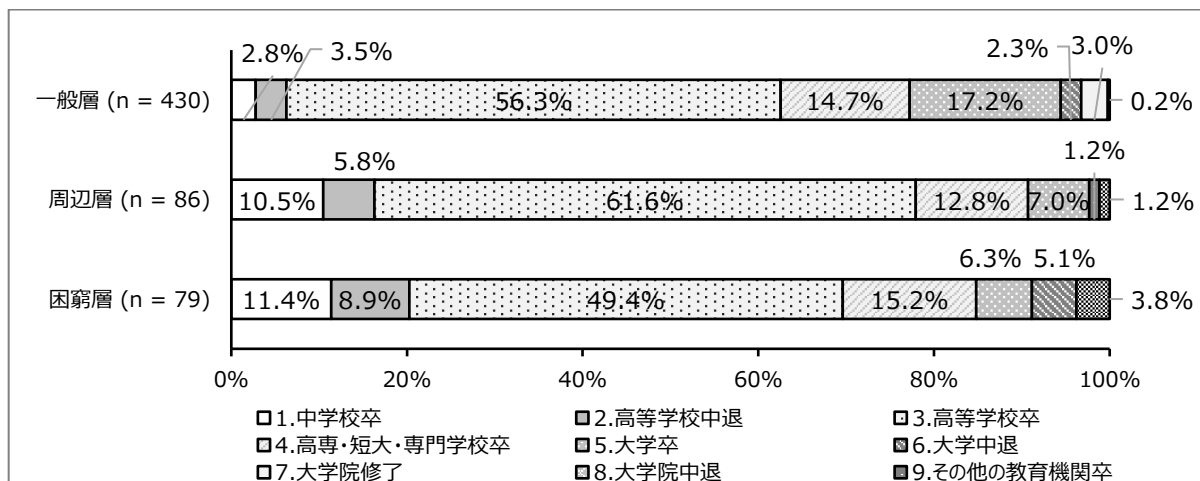
1. 保護者の学歴・就業状況

(1) 保護者の学歴

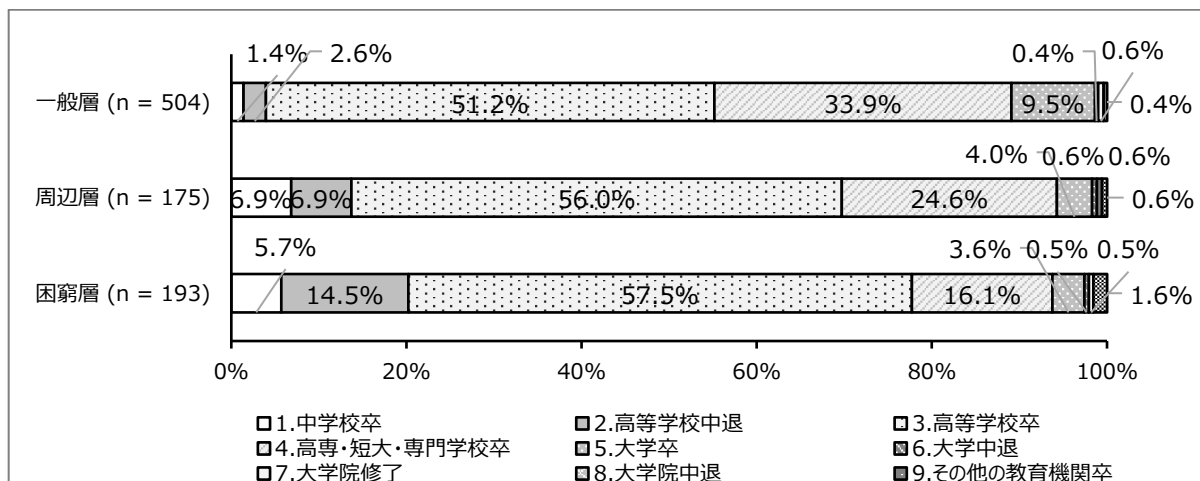
保護者に、自身の最終学歴をたずねた。まず、両親ともに、全体としては「高等学校卒」が最も多く、過半数を占めた（父：56.6% 母：53.5%）。父親の生活困難度別に見ると、「中学校卒」の割合が一般層（2.8%）となり、周辺層（10.5%）、困窮層（11.4%）との間で差が大きく、困窮度と一定の関連が見られる。また、「大学卒」の割合も一般層（17.2%）と他2つの層で10ポイント以上の差が生じている。

次に、母親の生活困難度別では、困窮層の「高等学校中退」割合が高く、一般層の5.6倍程度となっている。また、専門学校から大学院までの高等教育に進学した割合でも、一般層（44.4%）、周辺層（29.1%）、困窮層（20.7%）で差が見られ、こちらも困窮度と一定の関連が示されている。

<図表 6-1-1 父親の最終学歴：生活困難度別>



<図表 6-1-2 母親の最終学歴：生活困難度別>



(2) 就業状況

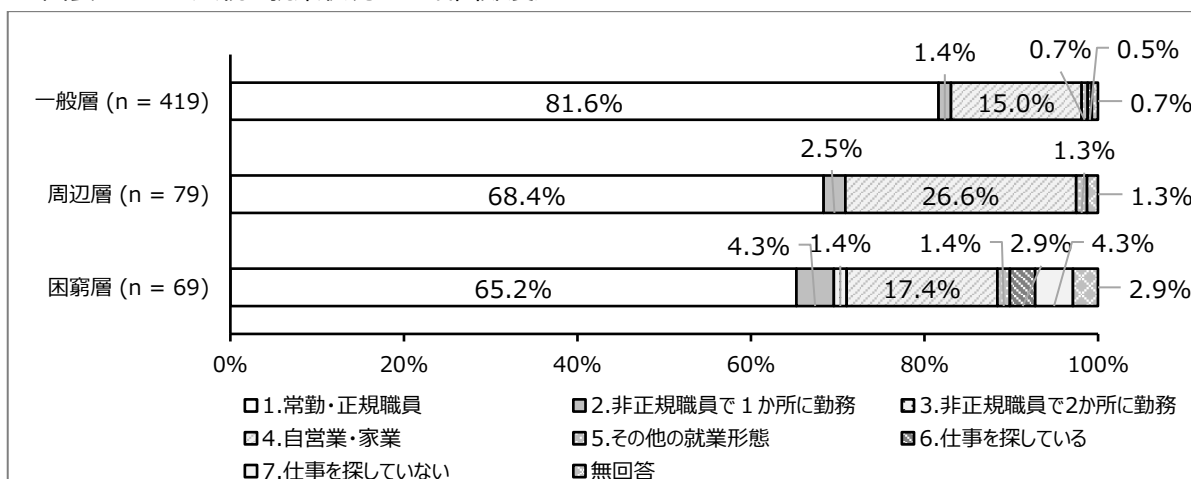
保護者に、父親、母親、父母以外で生計を支えている方の就業状況についてたずねた。まず、父親は、全体の77.1%が「常勤・正規職員」として働いており、自営業と合わせると94.7%を占める。生活困難度別では困窮度が増すと「常勤・正規職員」の割合が低下し、一般層と困窮層では16.4ポイントの差が生じている。

次に、母親では「非正規職員で1か所に勤務」の割合が最も高くなった。生活困難度別では、「非正規職員(1, 2か所勤務の計)」の割合が一般層で34.7%に対して、周辺層(47.4%)、困窮層(45.8%)となっており、一般層と他2つの層の間に差が生じている。また、困窮層の1割は「仕事を探している」。

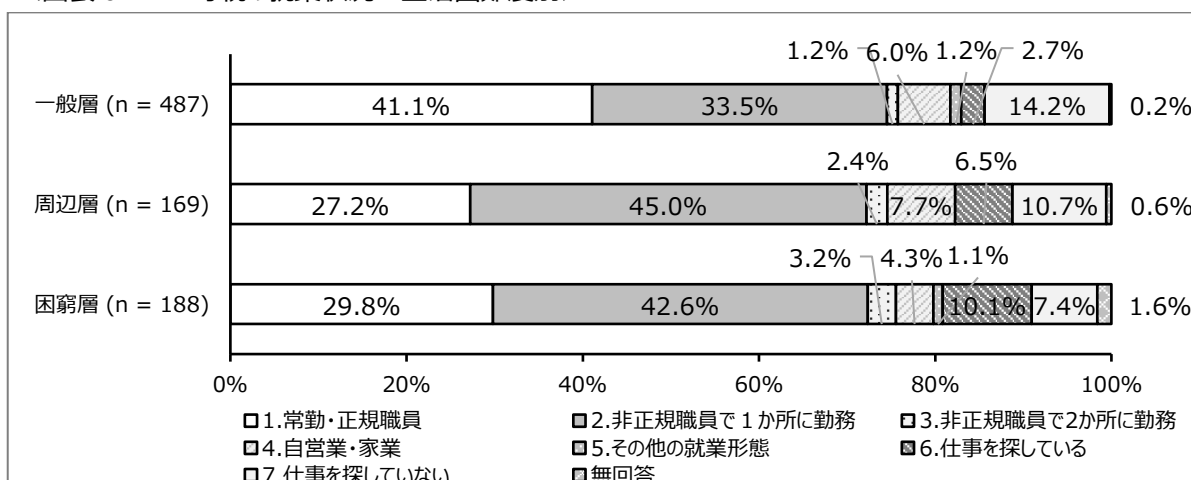
また、全体では、母親の121人(父親は3人)は「仕事を探していない」と回答しており、そのうち一般層の大半は「家事や育児に専念」としているが、周辺層では約2割、困窮層では約4割が「病気療養」と、健康面を理由にあげている。

最後に、父母以外の生計維持者では、6割超が「常勤・正規職員」又は「自営業・家業」と回答している。ただし、生活困難度別に見ると、一般層で「常勤・正規職員」と「自営業・家業」の計が70.0%であるのに対して、周辺層(53.8%)、困窮層(37.9%)と、差が生じている。

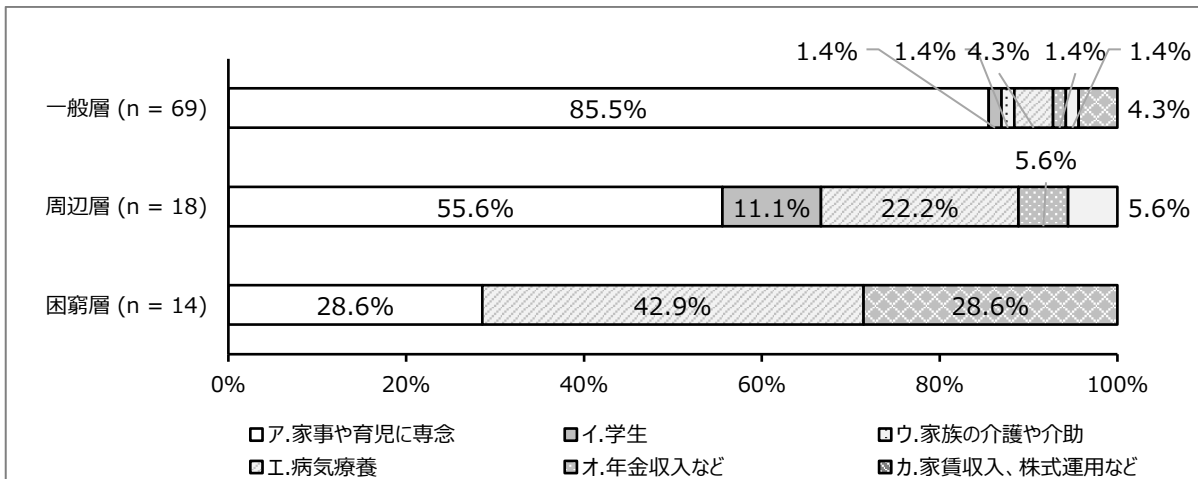
<図表 6-1-3 父親の就業状況：生活困難度別>



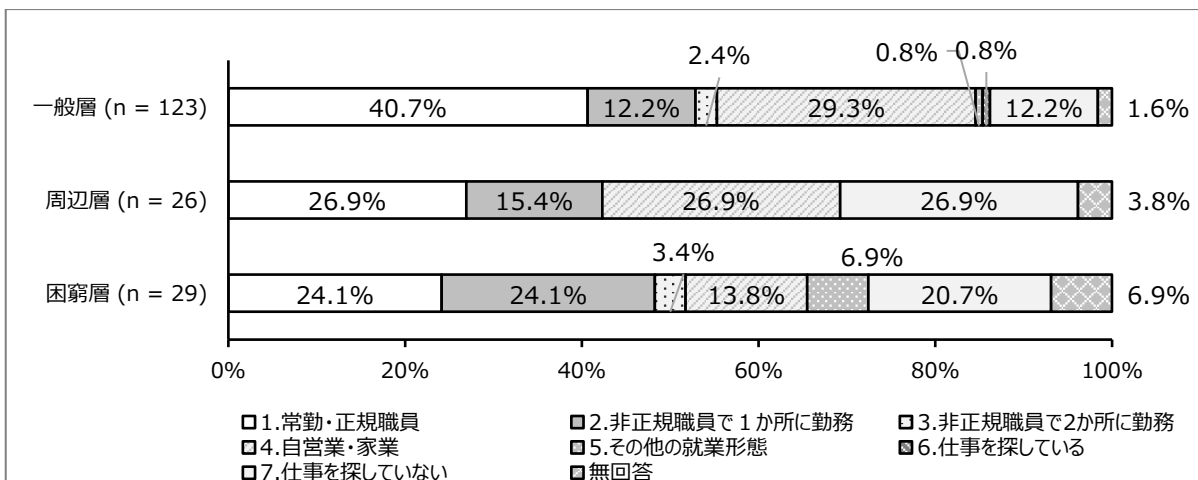
<図表 6-1-4 母親の就業状況：生活困難度別>



<図表 6-1-5 母親の仕事を探していない理由：生活困難度別>



<図表 6-1-6 父母以外の者の就業状況：生活困難度別>

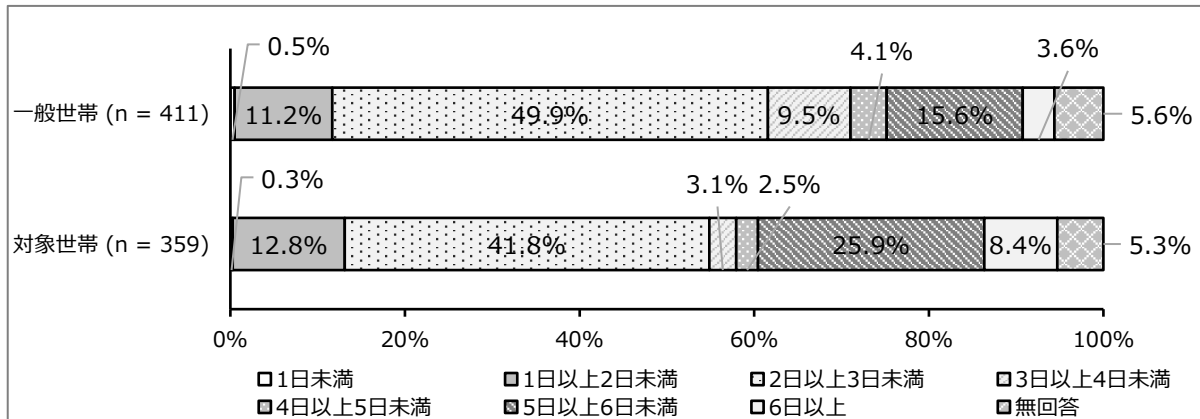


(3) 週休・夜勤の状況

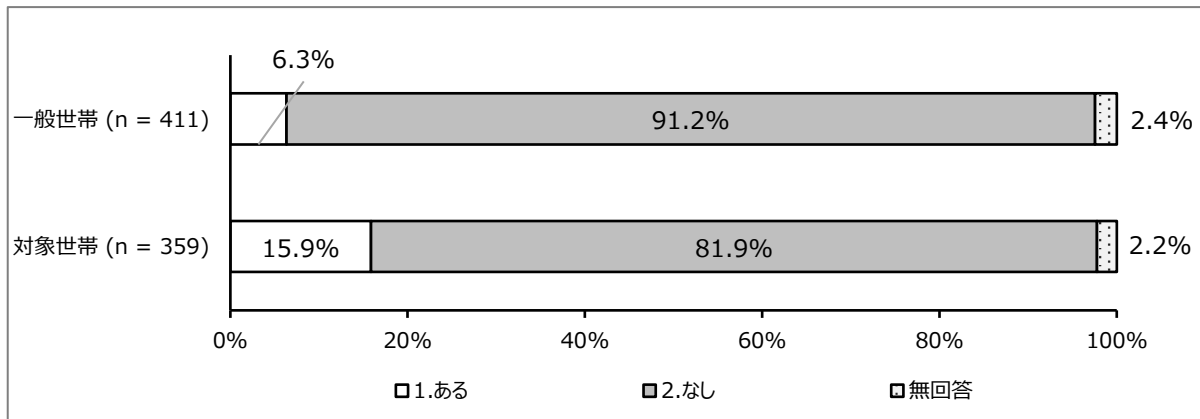
父親、母親、父母以外の生計維持者に、休みと夜勤の有無をたずねた。

母親については、全体の46.1%が「2日以上3日未満」の休みをあげている。一方、対象世帯の4人に1人(25.9%)は「5日以上6日未満」の休みと回答しており、パートタイム等の非正規労働をしている者が多いことが示唆される。また、夜勤の有無については、一般世帯(6.3%)と対象世帯(15.9%)で9.6ポイントの差が生じており、子どもとの時間を共有することが難しい者が多いことが推測される。

<図表 6-1-7 母親の週休の状況：一般・対象世帯別>



<図表 6-1-8 母親の夜勤の有無：一般・対象世帯別>



2. 保護者の健康・障害

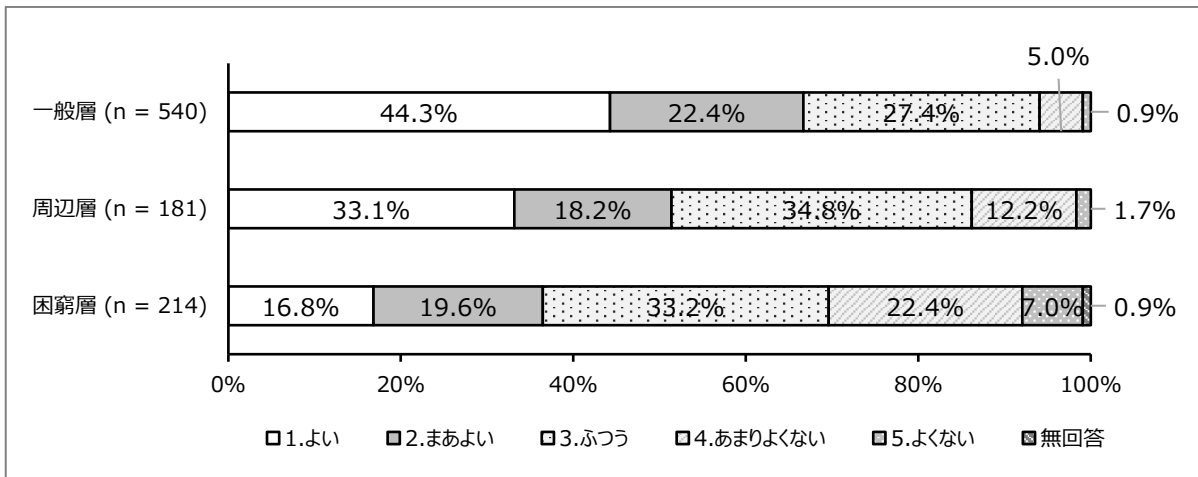
(1) 健康状態

保護者に自分自身の健康状態をたずねた。全体では、過半数の 56.5%が「よい」又は「まあよい」と回答している。

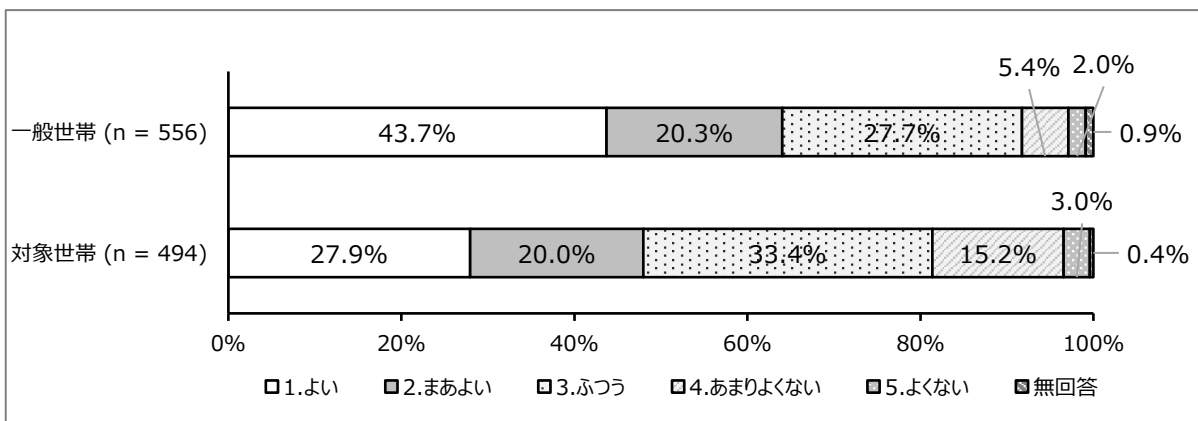
生活困難度別に見ると大きな差が生じており、健康状態が「よい」割合は、一般層（44.3%）、周辺層（33.1%）、困窮層（16.8%）と、困窮度が高まるごとに低下している。一方、「あまりよくない」と「よくない」の合計も、一般層は 5.9%だが、周辺層 13.9%、困窮層 29.4%と、困窮層は一般層より 23.5 ポイントも高く、生活困難度と健康状態の関連が見られた。

これは、世帯タイプ別に見ても同様の傾向を示しており、一般世帯は「よい」の割合が 43.7%であるのに対して、対象世帯では 27.9%と大きな開きがある。

<図表 6-2-1 保護者の健康状態：生活困難度別>



<図表 6-2-2 保護者の健康状態：一般・対象世帯別>

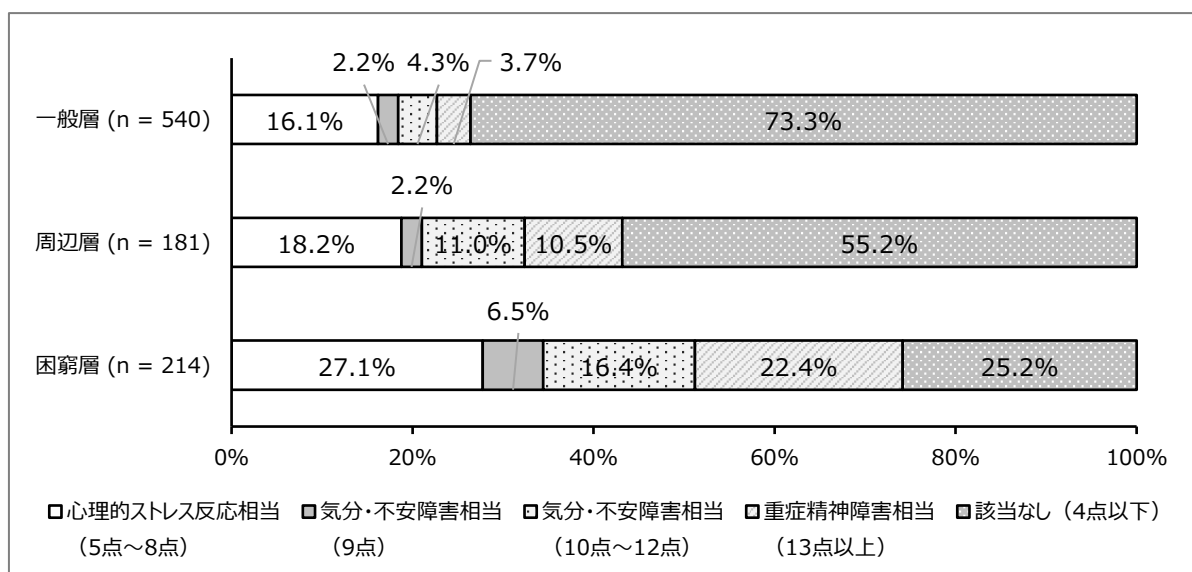


(2) 心の健康

次に、一般に心の健康を測る指標として普及しているK6（ケーシックス）指標を用いて、保護者の心の健康状態を測定した。K6は、過去30日の間での心の状況（6項目）を指数化し、点数によってそれぞれ「心理的ストレス反応相当（5点～8点）」、「気分・不安障害相当（9点及び10点～12点）」、「重症精神障害相当（13点以上）」に分類される。いずれの指数も、全ての項目を回答しているもののみを分析対象とした。

生活困難度別に見ると、該当なし（4点以下）は、一般層が73.3%であるのに対して、周辺層（55.2%）、困窮層（25.2%）と割合が低下し、困窮度と心の健康の関連が見られる。特に困窮層では、7割以上がいずれかに該当し、約4～5人に1人は「重症精神障害相当」にも該当している。一般層と周辺層でも差は生じているが、困窮層はその割合が極めて高い傾向が見られる。

<図表 6-2-3 保護者の抑うつ傾向：生活困難度別>



3. 社会とのつながり

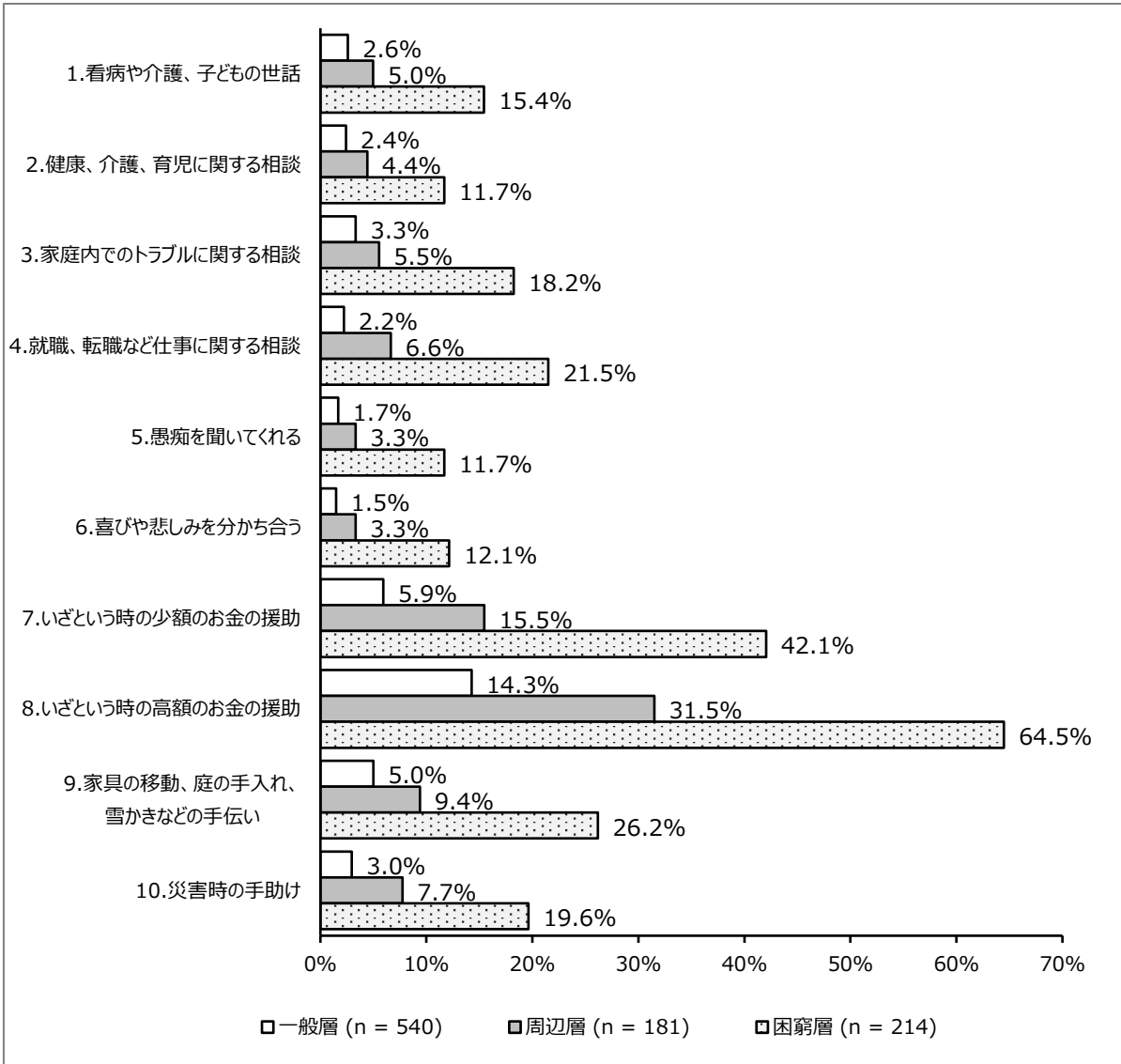
(1) 頼れる人の有無

先行研究でも生活困窮状態にある家庭は、社会的に孤立しがちであるため、必要な支援が受けられず一層困難な状況に置かれてしまうとの指摘があり、社会とのつながりの状況を把握することが必要であるとしている（内閣府, 子供の貧困対策, 調査研究, 「3.2. 社会とのつながりの把握」）。そこで、本調査でも「国立社会保障・人口問題研究所『生活と支え合いに関する調査』（平成 24 年度）」を参考に、保護者に対して様々な事柄ごとに、頼れる人の有無をたずねた。

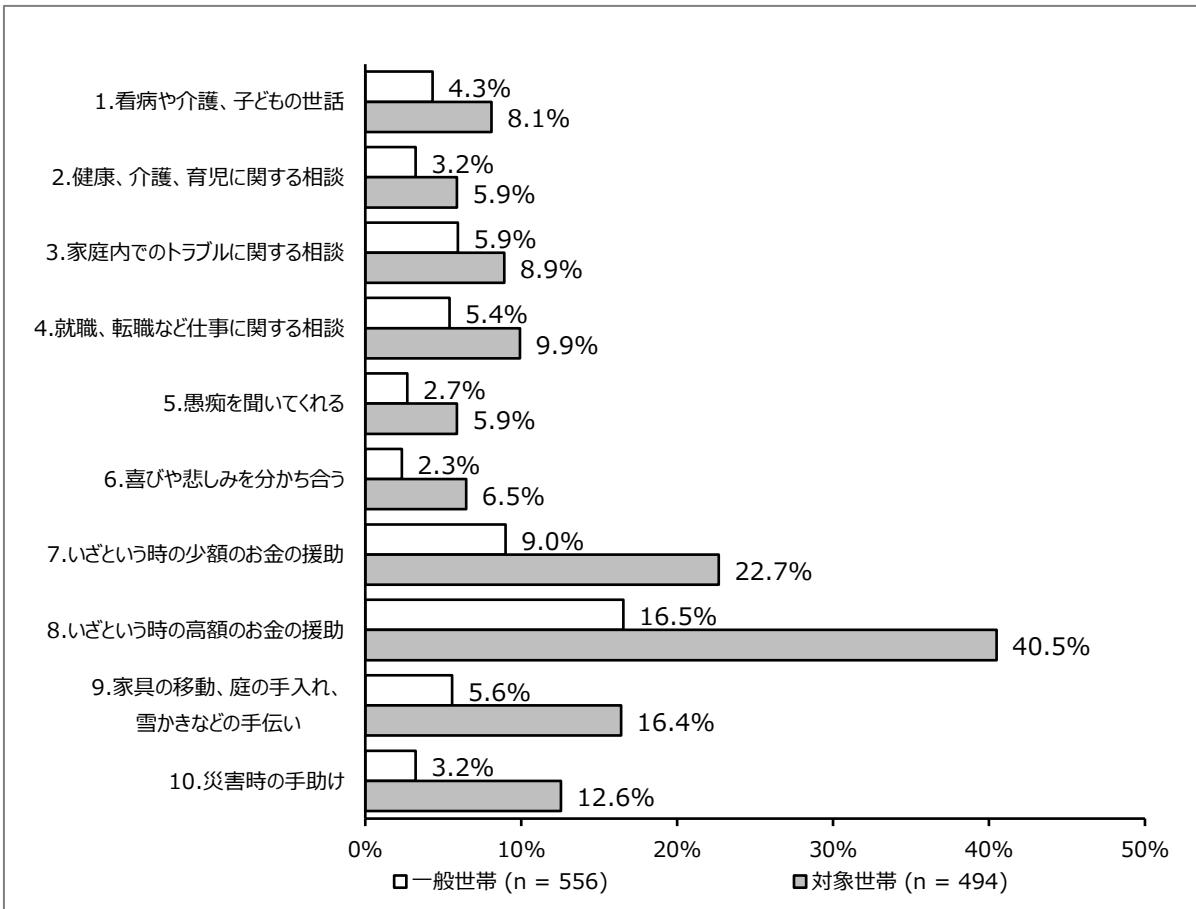
まず、「頼れる人はいない」の割合を生活困難度別に見ると、すべての事柄において困窮層が高く、続いて周辺層、一般層の順となり、困窮度が高い方が頼れる人がいないことがわかった。特に「いざという時の（少額又は高額）のお金の援助」、「家具の移動、庭の手入れ、雪かきなどの手伝い」、「就職、転職など仕事に関する相談」で差が大きく、「高額のお金の援助」では、困窮層が64.5%と突出しており、一般層より50.2ポイントも高い結果となった。

次に、世帯タイプ別で見ると、生活困難度別と同様にすべての事柄において対象世帯の方が一般世帯より頼れる人がいないという結果になった。また、差が大きい項目も、「いざという時の（少額又は高額）のお金の援助」、「家具の移動、庭の手入れ、雪かきなどの手伝い」となり、同様の傾向を示している。

<図表 6-3-1 頼れる人がいない割合：生活困難度別>



<図表 6-3-2 頼れる人がいない割合：一般・対象世帯別>



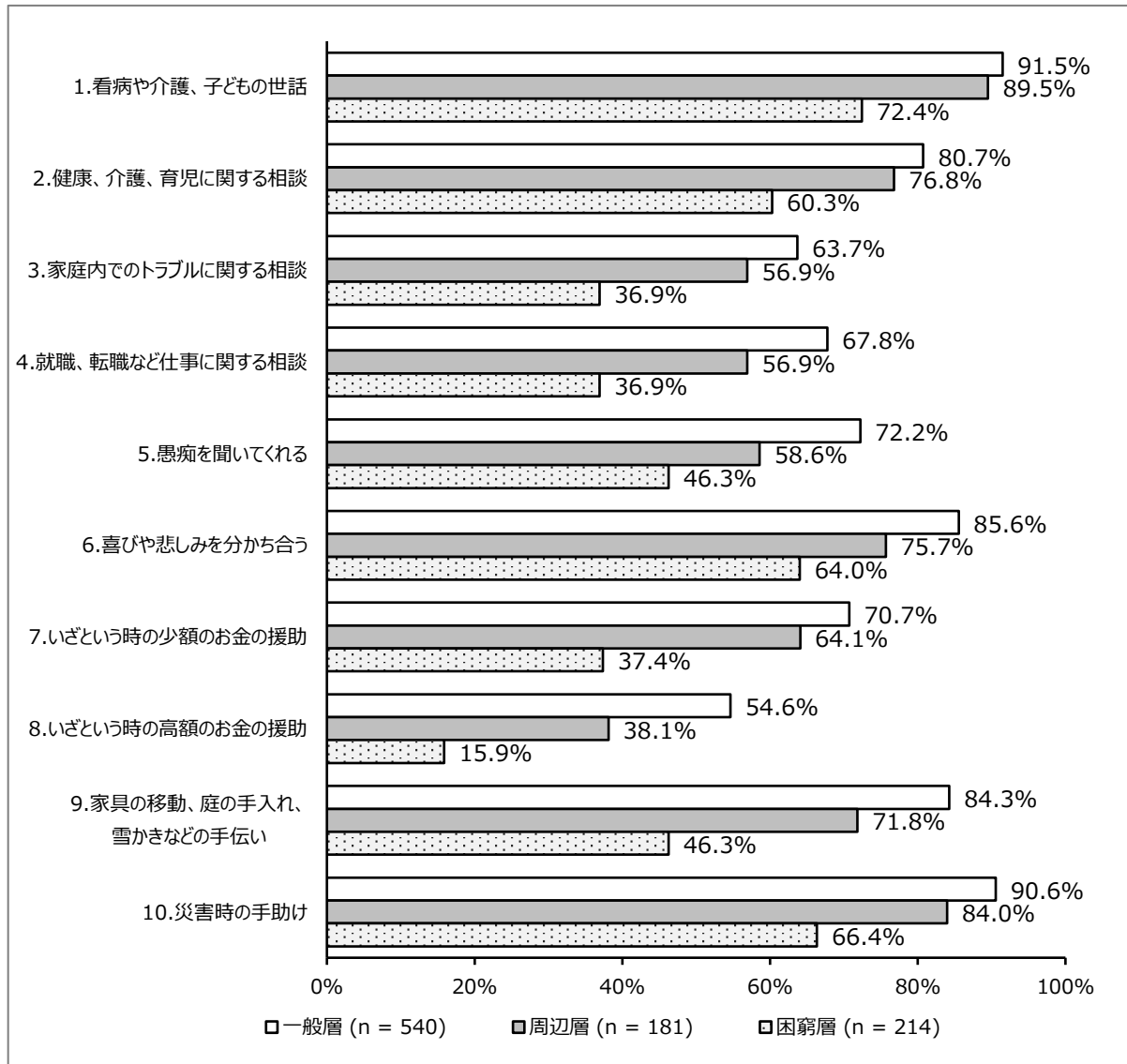
(2) 頼れる人

(1)を踏まえ、様々な事柄を頼る場合、「誰に頼っているのか」を生活困難度別に比較した。まず、最も身近な存在である「家族・親族に頼る割合」を見ると、ほとんどの事柄で高割合となっており、かつ、すべての項目で一般層の割合が高く、周辺層、困窮層の順になっている。また、「就職、転職など仕事に関する相談」、「いざという時の（少額又は高額）のお金の援助」、「家具の移動、庭の手入れ、雪かきなどの手伝い」などで特に差が大きく、「高額のお金の援助」では一般層（54.6%）と困窮層（15.9%）で 38.7 ポイントの差がある。

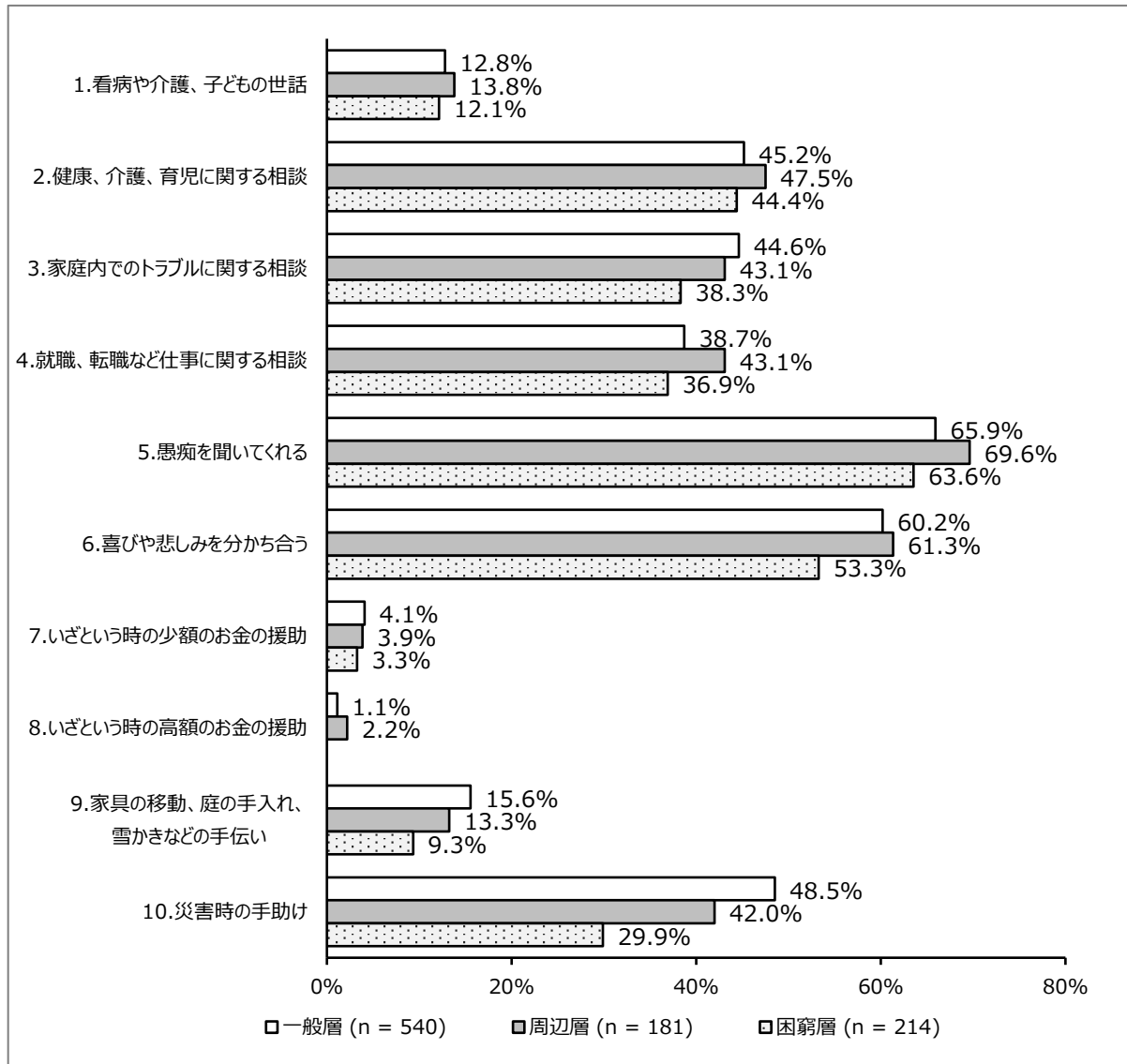
次に、「友人・知人に頼る割合」を比較すると、「家具の移動、庭の手入れ、雪かきなどの手伝い」、「災害時の手助け」においては、困窮度と割合とに関連が見られ、後者では、一般層と困窮層で 18.6 ポイントの差がある。ただし、家族・親族とは異なり、ほとんどの項目で差が生じておらず、その差も家族・親族と比較して小さい。

最後に、「近所の人に頼る割合」を見ると、全体的にすべての事柄で頼る割合が低い、「家具の移動、庭の手入れ、雪かきなどの手伝い」、「災害時の手助け」においては頼る者が多くなる。生活困難度別では、数値は低いものの「看病や介護、子どもの世話」、「愚痴を聞いてくれる」などで、一般層は困窮層より約 3~4 倍割合が高く、「災害時の手助け」で 15.9 ポイントの差がある。ただし、友人・知人と同様に、家族・親族に頼る割合ほどの差は生じていない。

<図表 6-3-3 家族・親族に頼る割合：生活困難度別>



<図表 6-3-4 友人・知人に頼る割合：生活困難度別>



<図表 6-3-5 近所の人に頼る割合：生活困難度別>

